

GTR 院生企画 “院生企画に Zoom In !” 活動報告

報告者 川瀬 雅貴

【概説】

この院生企画は Web ミーティングアプリケーション Zoom を利用したグループワーク企画であり、その目的は GTR 学生間の交流促進である。

企画名	院生企画に Zoom In !	
実施日	2020年6月12日	
プログラム	15:00 - 15:10	オープニング
	15:10 - 15:50	グループワーク 第1セッション
	15:55 - 16:15	グループワーク 第2セッション
	16:20 - 16:40	グループワーク 第3セッション
	16:45 - 17:25	グループワーク 第4セッション
	17:30 - 18:05	成果発表
	18:05 - 18:30	アワード発表、総評
企画者	正木 佑治 (D2) 創薬科学研究科	細胞薬効解析学分野
	木下 悟 (D2) 理学研究科 (生命)	植物生理学グループ
	伊藤 正人 (D2) 理学研究科 (化学)	機能有機化学研究室
	野場 考策 (D1) 工学研究科	堀研究室
	川瀬 雅貴 (D1) 生命農学研究科	ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室

【本企画の背景/目的】

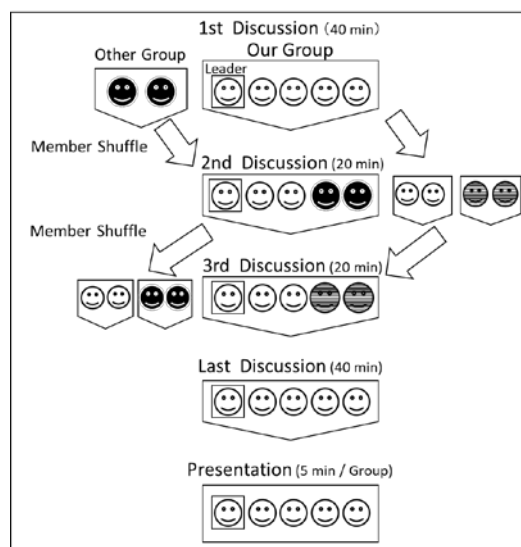
2020年2月頃より、COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) の流行のため、人と人の接触が発生するイベントや会議などの中止または延期が余儀なくされ、現在も自粛状態は続いている。GTR プログラムの各種イベントや講義も例に漏れず、多くの制限が発生した。本来ならば6月に予定されていた GTR リトリート合宿の開催も見送られ、各授業もオンライン上での開催となり、学生間の交流が乏しくなっていた。とりわけ、今年度4月の QE1 を経て融合フロンティア研究を本格的に開始した M2 生、また今年度 GTR 生としてプログラムに参画し、融合研究プロポーザル作成に向けての取り組みを始めた M1 生たちの交流機会は絶望的状況であった。

GTR プログラムの最大の特徴である、異分野融合による研究突破力の向上には、人と人の交流が重要な要素であり、何よりも自身の知らないもの、体験したことのないものを持っている他者との交流は非常に刺激的であり、交流それ自体も非常に価値のある行為である。

そこで COVID-19 流行により学生間交流が停滞している現状を打破し、学生の活発な活動を促進すべく、報告者たちは Zoom を利用したグループワーク企画を6月12日に実施した。

【企画の内容】

本企画は、参加を希望した GTR 生を 5~6 人のグループに分け、グループディスカッションを行い、学生同士の交流を起こした。本企画の参加者は GTR 生 42 名（企画、世話役含）、教員 15 名、GTR 関係者 2 名の計 59 名であった。学生グループは 7 つ作られ、各グループは短時間ながらも、深い議論を行った。ディスカッションの共通目的は“新たな GTR 院生企画”の立案であり、参加者への事前アンケート結果から、各グループ個別に企画のタネを設定した。企画のタネは、『融合研究』『キャリアパス』『アウトリーチ』『国際交流』など議論の中心となる話題である。各グループで総計 2 時間のディスカッションを行い、院生企画の申請書を作成、5 分程度の発表を行った。本企画ではディスカッションを 4 つのセッションに分け、第 2、3 セッションでは他グループとのメンバーシャッフルを行い、より広い交流機会を与える制度を作った（上図）。また、発表後に魅力的な企画を発表した 3 つグループに GTR Special Award 山口賞/小坂田賞/支援室賞を授与した。



より広い交流機会を与える制度を作った（上図）。また、発表後に魅力的な企画を発表した 3 つグループに GTR Special Award 山口賞/小坂田賞/支援室賞を授与した。

【本企画の成果】

本企画により、学生同士の交流が盛んに行われた。成果発表でも多数の魅力的な企画が発表された。参加者は、未だ GTR 内の交流機会が得られていない M2、M1 生が多く、学生間交流のニーズを再認識した。また、本企画が終了して 1 週間が経たない報告書作成時にも、既に複数のグループメンバーが院生企画に興味を持ち、本企画で発表した案を実行に移すべく動き出していることが報告された。本企画から多数の新たな企画が生まれ、それが実行に移されることで、GTR プログラムが学生主体で更に活発になる事が期待される。また、メンバーシャッフルの制度の効果は面白く、移動先の議論に感化され、自身が所属していたグループを離れ、興味のある案に積極的にアプローチをかけた学生も出てきた。交流によって新たな価値観や活動が次々に生まれるような、ポジティブ・フィードバックの流れを作る起爆剤としての役目を、本企画は十分に果たすことができたと評価できる。

更に、副次的効果ではあるが、各グループの立案などから、GTR 生の欲する所が明確になり、これは GTR プログラムを管理、運営をしていただいている教員やスタッフの皆様だけでは引き出せない、学生の等身大の需要が浮き彫りになったといえる。この需要をフィードバックさせていただくことで、GTR プログラムがより一層の発展を経る事ができると、報告者は考えている。

最後に、本企画は企画者たちにとっても重要な経験を得るものであった。本企画が走り始めた時、その内容は Web 上でできる交流企画と決まっているだけで、その内容や実効性は明確にできていなかった。しかし、それぞれが異なる研究科に属する企画者たちの、多種多様な意見や視点を止揚させることで、一人の考えや働きだけでは叶えられない、魅力的な企画が出来上がった。このことは図らずとも GTR の特徴である、異なる分野や手法を組み合わせることにより研究突破力を向上させるという戦略に通じるところがあり、企画者たちは身を持って異質なものを組み合わせる強みを体感することができた。